
明日への系譜

ツキトハクヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日への系譜

【Nコード】

N4906Z

【作者名】

ツキトハクヤ

【あらすじ】

強大で稀有な力を持つてしまった少年――結木彩人ゆいき あやとは自分の持つ力を嫌い、その力を使わずに自分の大切な人たち――大切な幼馴染の少女 家族より長い時間を過ごした双子の少女たち 不思議な居候自分を理解してくれた親友たち――を守るための力を得るためにギルドに入学する。そこには彼の守りたかった人たちがいて、彼は力を使わずに平穏な日々を送れるのか、そして彼は背負っている罪を許せるようになるか。

主人公最強 ハーレムなどを含みます。更新も一週間に一回できる

かどうかなので辛抱強くお読みください、と言いましたが作者がへたれただけで実際はもう少し余裕があったので週に二回か三回ぐらいは投稿します。

入団式

草原に一人に少年が寝ていた。

外見は黒髪で端正な顔立ちをしていて年は15歳くらいだろうか。その少年の手には一つの紙が握られている。

「ふう よく寝た」

目が覚めた目も紙と同じで黒く活発な印象を受ける。少年はあたりを見回し何かを思い出す様に。

「そろそろ時間だな。間に合わなくなりそうだし」

そうつぶやくと少年は空に手をかざす。

そこから幾何学模様——一般的には魔法陣と言われている——が浮かび上がり、

「転移 ディアフェール」

そして少年は音もなく消えた。

この瞬間から物語の歯車はゆっくりとしかし確実に動いていく。

side 梨紅

「これから第59回入団式を始めろぞー」

こんな風に投げやりに始まったのはギルド 旅立つ為の羽 の入団式。

入団する人の内は8歳から20歳までは学園に入る義務があり、こ

の式は学園に入学する人のクラス分けなども兼ねている…らしい。

「まず新入生代表、前へ」

と毎年恒例になっている新入生代表のスピーチが始まり…

「ねえ梨紅、あの代表の子かつこ良くない。」

「またそんな事を言ってる。」

そんなことって何よー、だからモテる子とはかつぶやいてるのは聞こえないふりをしてしていると

「毎年やっている新入生代表と在校生代表の模擬戦闘だが、今回は特例として新入生代表以外にやってほしいのでID30113と在校生代表で模擬戦闘をしてほしい」

会場からあちこちから驚きの声が上がる。それもそうだと思う。何故ならこんな特例今までに1度もないのだから。そしてその新入生はどんな人物かと必死で探している人もいる。そしてIDというのは、入団する際に配られる身分証明書みたいなもの。

「模擬戦闘は今から30分後に闘技場で行う」

その言葉をきっかけに会場からみんな我先にと出て行く。気が付いたら会場に残ったのは私と他数人しかなくなっていた。そしてその内の二人の見た目は二人ともかつこいいと言われてもおかしくない黒髪の少年と茶髪の少年がいて争っている。茶髪の少年は有名だから知ってる、顔見知り程度だけど。名前は立花^{たちはな}煉^{れん}だったと思う。

「…だからなんで起こしたんだよ。おれは眠いんだよ」

「あほか、俺や達也達も入団式では寝なかったよ。第一入団式で寝ようと思うやつ普通は入ないぞ。第一お前、何やらかしたんだよ。新入生代表の代わりに模擬戦に出るって。」

「あー特に何もやらかしてないんだけどねえ」

「別にいいや、早く準備しろよ。お前が負けるとは思わないけど」

「けどめんどくせえな」

と言って立花君と黒髪の少年は会場から出て行った。

「ねえねえ梨紅どうしたの立花君に惚れたの、それともあの黒髪君に」

「変なこと言わないでよ。私たちも闘技場にいい」

と会場を後にした。

彩人と梨紅（前書き）

もうすぐユニークアクセスが100になります。駄作ですが、これからよろしくお願いします。

彩人と梨紅

side 梨紅

私はクラスメイトと一緒に闘技場へ向かう途中、雑談をしてたりする。

「ねえ今年ってだれが新入生と戦うの」

「ええと、確か高等部の一年生でしょ。期待のエースって言われている人」

「性格悪いって話だよねえ。梨紅は何か知ってるの」

「特に聞かないなあ、それと先輩の蔭口はやめようよね美代子 紗知」

私たちは中等部の三年生でうちのギルドは学園も兼ねているので生徒にはギル学と言われている。

さつきも言った様に8歳から20歳まで学園にいますので、小等部・中等部・高等部・大等部があり、

校舎などの施設は別れているけど、こういった行事などは一緒に参加する。あとそれぞれに生徒会があり私は中等部の生徒会書記を担当していたり。他のメンバーは機会があったら、ということ。

「梨紅は相変わらず固いねえ、あの人属性何だっけ」

属性というのは魔法の属性で、人それぞれで基本的には四大属性・炎・水・風・土・と理と言われる属性・氷・雷・最後に交わることはない対極の属性・光・闇・の三種類だけど、たまに希少なレア属

性を持つ人もいるらしいけどあまり見たことがないのでよく知らないけど。そして基本は一人一つの属性を二つ使う人もいてその人たちは多重デュアルと言われる。だいたい多重持ちは100人に一人ぐらいかな。

私は水だけだけど。そういえば対極と理だけつまり氷と雷、光と闇は今までで一人もない。

「確か土だった気がする。新人生は何だろうね」

と話しているうちに闘技場についたら、

「うわっ何これ、どんだけ人いるのよ」

紗知、言葉づかい悪いよ。と言おうとしたら

「後5分で模擬戦が始まります」

ということが放送されたので席を確保するためにスタンドのほうに歩いて行った。

席を確保した時にはもう五分は過ぎていたらしく、試合開始の放送が入った。

「入団式のインスピレーション在校生対新人生の模擬戦を開催します」

そして対戦する二人ががお互いに出て

『くにすぎ 國杉 たいがゆいき 大河対 あやし 結木彩人の』

私は自分の目と耳を疑った。そう、新人生の名前が私、杉本 梨紅の、
行方不明の幼馴染の名前だったから。

そして私の記憶では、幼馴染は黒髪黒目の少年だったからだ。他人の空似という可能性を考えずに、

「彩人君」

と呟かずにはいらなかった。

side 彩人

「なんでこんな目に逢っているんだ」

あたりには、あり得ないくらいの人。この模擬戦の観客だが。そして目の前には、対戦相手の在校生さんが殺気に満ち溢れた顔でこちらを見ている。

俺は、自分の知らないところで何かやらかしたのだろうか、というどうでもいいことを考えていると、

『入団式のインスピレーション在校生対新生生の模擬戦を開催します』

というアナウンスが入り、俺は今日何度目かの溜息を漏らした。なぜこうなったのか考えてみよう。

（30分前）

俺こと結木 彩人はギルドの入団式に出席するため魔法陣を展開し、ギルドのある土地・ディアフェーン・に転移して会場に向かった。OKここまでは問題ないよな。

式に間に合うかぎりぎりです受付でIDというものをもらい、会場に滑り込んだ。

そんなかんやで、俺の体力は限界で式が始まった瞬間に寝てしまった。

それで起きたら周りに人がいないのでかなり焦ってたのだが、そこには親友もとい悪友の姿があり、（名前は立花 煉）声をかけた。そしてらそいつがIDの番号は幾つだと聞くので素直に自分の番号（30113）を喋ったら

憐みの表情で見てくるので何だよと言ったら

「お前、まさか式の内容を聞いてなかったのか。お前が新入生代表の代わりに在校生代表と勝負するんだぞ」

「えっ マジで」

「まじだつて。ていうか寝てたのかこの式の間。あつだから石投げても起きなかったんだ」

「それいつ」

「ついさっき」

「それで起きたんだよ。何で起こしたんだよ。俺は眠いだよ」

「あほか、俺や達也達も入団式では寝なかったよ。第一入団式で寝ようと思つやつ普通は入ないぞ。第一お前、何やらかしたんだよ。新入生代表の代わりに模擬戦に出るって。」

ちなみに達也というやつも俺の友人もとい悪友その2の名前。

「あー特に何もやらかしてないんだけどねえ」

「別にいいや、早く準備しろよ。お前が負けるとは思わないけど」

「けどめんどくせえな」

と言って会場を出た。溜息をつきながら、とりあえず闘技場のほうへ案内してもらっている。

「なあ煉、模擬戦ってさぼったらだめか」

いや駄目だろ、と一瞬で否定された。がこれには理由がある。

「お前があれを使いたくないのは分かってる。だから・収束・ぐらいで済ませろよ」

「ああけどいずれは」

「わかっている。そのときは俺も手伝ってやるよ。グダグダいってねえでさっさと行くぞ」

と拉致されてしまった。俺は知らず知らず溜息のついていた。

彩人と梨紅（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）などありましたら遠慮なくお願いします。

再会（前書き）

バトルシーンが難しい。

再会

side 彩人

「なあ煉、俺の相手ってそんなに強いのか」

これは聞いておきたい。なんせ在校生の代表だ、そこまで弱いわけではない と思う。

こいつはいろいろ知ってそうだし、知って損はない。弱いなら弱いで手を抜けて楽しな。

「どうだろ。戦ったことはないし、よくわからんが俺や達也、当然お前よりは弱いと思う」

「あてになんねえよ。俺はただけ手を抜くかっていうことだよ。お前さつきさ、- 収束 - を使えて言ったよな。それ、確実に面倒なことになるだろ」

俺は事情がある。って言ってもただの自己満足のプライドだけだな。今面倒なことに逢うのはまずい。

この - 力 - は強すぎる。俺はまだ力を使いこなせない。そして俺以外にこの力は使えない。絶対だ。

だから俺は、この力を使いこなすため、いやこんな - 力 - を使わなくて済むように強くなるためにここに来た。

「- 収束 - ならここでも何人か使えるから問題ないはずだし、いつかは使うんだよ、あれは。」

「納得がいかねえけど、まあいいや。とりあえず勝つ」

負けるつてのも納得いかねえしよ。そしてこのまま選手控室につき、煉と別れた。

「意外に広いなあ」

正直な感想な感想を漏らし、気持ちを入れ替える。指定された服に着替え、時間になった。

『選手は闘技場に入ってください』

俺はこの先のことを考えて不安になる半面少しワクワクしていた。何故なら久しぶりの戦闘だ。

「これじゃバトルジャンキーと変んねえな」

と苦笑しながら闘技場に入った。

帰りたい帰りたい帰りたい…と思ってい待った理由は

『うおおおおおおおおー』

という感じに膨大なギャラリィは好奇心、相手は殺気に満ちた表情でこちらを見ていた。

く回想終了く

「おい、新人生。てめえはぶっ潰す」

と犯行予告され、ふと気がつく俺は相手の属性を聞いていない。しかしそれは相手も同じ。フェアプレイだ。

そして俺のギアを戦闘用にしようと思っていたら、アナウンスが入

り、

『学園長の風間だ。ここでルール説明を行う。あくまでインスピレーション、気絶程度の技以上は禁止だ。あと魔導核も禁止だ』

魔導核^{コア}というのは、自分専用の武器というのが一番手っ取り早い説明である。詳しく言うと、魔導核^{コア}は手のひらサイズの球体であり、使用者とともに成長すると言われている。姿形は変わらない。なぜかという、魔導核^{コア}は使用者の心を表すらしい。（色は別）しかし素材は改造^{カスタマイズ}できるし、武器も改造^{カスタマイズ}出来るが、平気で壊れたり壊れたら一々直すのが面倒などあるが、使い勝手もいいという点でほとんどのギルドに所属している奴は持っていると言われる。魔導核^{コア}は一人一つで、他人の魔導核^{コア}を使おうとすると拒絶反応が起き、使用者に負荷がかかる。ここはフェアプレイと言う事で、魔導核^{コア}は禁止なのだろう。

『正々堂々戦ってくれよ。それでは試合開始っ』

こうして賽は投げられた。俺は静かに寝ていたいのに。

戦闘前に選べた武器をとりだす。一本の細長い槍を -

side 梨紅

「槍だとお。何考えているんだよあいつは」

たまたま隣で観戦していた立花君が叫んだ。なんでだと疑問に思い、聞いてみると、

「あいつは得意な武器は剣や刀だよ。少なくとも俺はあいつがそれ

以外使ったのを見たことがないんだよ」

「立花君と彩人君の関係ってどんな感じなの」

これは聞いておきたかったりする。

「一年前からの知り合いだよ。ギルドの依頼で知り合ったんだよ。そういえば杉本も彩人の知り合いみたいだけどそっちは」

「私はただの幼馴染だよ。……多分」

そう私には確証がない。今戦っている彩人君が私の幼馴染か、どうかだ。けれど私は、私の記憶はすぐに“彼”が私の知っている結木彩人だと思った。最後に会ったのは六年も前なのに。

「ふうん、訳ありが。まあいいんじゃないか」

私は訳もなくありがとうと言いたかったが、戦闘の音で言えなかった。そっちのほうを見ると、國杉先輩の放った魔法を彩人君が避けている。それだけでもすごいがさらに全部見切って紙一重で避けている。

これは単純に彩人君に技量だ。

「すごい…」

私のひとりごとだったが、立花君はそれに答えた。

「あいつは基本は攻撃は可能な限り躲す。あいてのパターンを知るまでは。そろそろだな」

と言った瞬間、彩人君が相手に突っ込んだ。しかし、それを読まれたらしい。カウンターをくらって吹っ飛んでしまった。

「あいつ手を抜いてるな。彩人デメえ手え抜くなよ」

と立花君が叫ぶと、彩人君はこつちを向くと驚いたように口を動かした。立花君は気付かなかったようだが、私にはわかった。

梨紅と

再会（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）・ご指摘がありましたら遠慮なく
お願いします。

収束（前書き）

二日、三日は更新できません。何故なら部活で合宿に行くからです
よ

収束

side 彩人

右から三発、正面から一発

これぐらいの魔法なら、避けられる。今俺は模擬戦の最中というか始まったばかりなのだが、相手が開幕速攻に初級魔法 - 石の破片^{ストーンエッジ} - を使ってきたので避けている。

「どうした、新入生お前は逃げるので精一杯か。それとも俺の魔法量が尽きるのを待っているのか」

魔法量とは個人でどれだけ魔法が使えるかを表した量のことである。魔法量が尽きると、魔法が使えなくなり再び魔法を使用するには時間がかかる。さらにその状態で無理に魔法を使えば体への負担は計り知れない。なので魔法量が尽きると、ぶっ倒れる・暫く体に力が入らなくなる などすぐに医務室で絶対安静なるぐらいの危険である。最悪は命に関わるので最近の魔法は、安全装置^{セーフティ}のプログラミングが義務付けられている。だから俺は、相手が魔法量を使いきってくれるといいなあと思って避けていたのだが、相手もそんなに甘くなかった。

「さてそろそろ消えてもらおうか。俺の名誉のために」

大技でも撃ってくるのだろうか、それはさすがにまずいのでそろそろこっちから攻めるためにを突っ込んでったら、それを読んでいたらしくカウンターをくらって吹っ飛んでしまった。

「痛つつ、手加減してもんを知らないのかねえ。向こうは先輩だろう」

とぼやいていると観客席からやけに大きな怒鳴りこ…じゃなく激励のお言葉が飛んできた。

「彩人デメえ、手え抜いてんくなよ」

要らねえお節介だ、と言おうと声のしたほうを見ると、やっぱり我が悪友・立花 煉・がいた。

「嘘だろ」

煉の隣には、茶髪で髪と同じ色の眼をした美少女がいた。他とは、あまり比べてはいけない気がするがとりあえず美少女だ。俺はその少女を知っていた。忘れるはずがない、俺の大切な幼馴染だ。名前は

「梨紅」

本物つまり俺の幼馴染である確率は高くはない。むしろ低い。さらに最後に会ったのは、確か六年ぐらい前だった気がする。しかしその少女は俺の口に動きで何と言ったか分かったらしい。そして彼女もこう口を動かした。ただ一言、

「彩人君」

と確実に言った。こればかりは断言できる。さっきまでは勝負なんてどうだってよかったが、幼馴染が見ているのに無様に負けるわけにはいかない。そして相手は奥の手を出すらしい。

「消えろ、ここは俺のものだ。この学園を手に入れるの俺だ。行け
・ロックブラスト・」

そして出てきた五つの岩がこちらにすごい勢いで向かってくる。そして

観客が息をのむ、それもそうだ。あれに当たったらひとたまりもない、が

「危ないなあ当たったらどうするんだよ」

「なぜ立つてられる。そんなぬるい威力じゃないぞ」

「だから危ないって言ったんだよ。まあ防げたけど」

こっちも仕返しだ。軽く本気を出す。煉の言ったことを信じよう。

「いくぞ」

体内をめぐる魔力を左手に集中する。魔力というのは世界に存在する粒子・マナと言われる・を体内で変換して魔力を製造する。まあ魔法を使うための元だ。ちなみにマナで魔法を使うと入力に対する出力が間に合わなくなり、最悪の場合、暴走してしまう。もしそうなったら、体内の魔力を使い果たすまで続いたため命が危なくなる。

あと魔法量と魔力の違いはまたあとで話そう。とりあえずそれを開放する。そして手には真っ白の刀が現れた。

観客がどよめく。それもそうだろうな、これができるやつなんてそう多くは入ないし、俺と同じような年でできるやつはほんの一握りだろう。

「う、嘘だろ、そ、それは・収束・」

そう、これは・収束・という。純粹な魔力で作られた刀、俺は属性

が氷なので白いが他にも色はあるが。なぜそんなものかと思うかもしれないが、これは必須である。なぜかという、魔法は純粋な魔力でしか斬れないからだ。魔法を防ぐには魔法を使うか、これで斬るしかない。

「ご名答。さてこっからが本番だよ」

そう言って相手に一瞬で間合いを詰め、斬りかかる。それで勝負はついた。勝敗は火を見るより明らかだった。

「一応手加減はしておいたぞ。そっちと違ってな」

『おおおおおおおお』

と、割れんばかりの歓声が聞こえてくる。そしてこっちに近ずいてくる人物が何人か。

「よう、彩人改めて久しぶりだな」

「おう」

そしてこれからが本番だな、と思いつつもその人物に声をかけた。

「よう、梨紅本当に久しぶりだな。確か六年ぶりだな」

「うん、久しぶりだね。…生きていたんだ」

最後は独り言のようだが、一応答えておこつ。

「勝手に俺を殺すなよ」

といたら、多分、忘れられないくらい綺麗でかわいいくて見惚れてしまうような満面の笑顔を一言だけこう言った。

「うんっ」

収束（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）・ご指摘がありましたら少しの間
返せませんが
遠慮なくお願いします。

勝利の後（前書き）

この小説をお読みの皆様にお願ひがありまして、ええと大変言いづらいのですがもしよろしければ、もしですよふざけんなと思う方が大半だと思いますが、作者をお気に入りに入れていただいたらなあということをおもってしまして（汗）嫌あのボタンとかボタンとかを回すのがですねが大変だなあということです。さびしいとかじゃありませんよ。決して、け、決して違いますよ。……すいませんさびしいです。ぜひ心のお広い方がいたら、作者をお気に入りに入れてください。お願いします。

勝利の後

side 梨紅

「彩人君だ、絶対」

私は断言できた。なぜと言われたら、多分答えられないだろう。ただ、不思議とそんな気持ちになったから。

「よくわからんが、良かったな。あいつもようやく多少真面目にやるみたいだ」

正直、彩人君の本気と言うのはよくわからない。今までも避けることに関してはこの学園でも上位だろう。そんな彩人君が今までまじめにやっていなかったのだろうか。

「消えろ、ここは俺のものだ。この学園を手に入れるの俺だ。行け
- ロックプラスチック -」

先輩が奥の手らしい魔法を放つ。地面から巨大な岩が？生えて？そのまま彩人君に向かっていく魔法みたいだ。
横から立花君が呟いた。

「あれは中級の魔法、この試合では禁止になっているはずだ。にしてもさすがは期待のルーキー、中級は使えるのか」

禁止にされているのは、相手が気絶するぐらいの威力以上なはず。魔法には、下級魔法・中級魔法・上級魔法に分けられている。だいたいこのギル学では、みんなが使える下級魔法、ある程度の人ができるのは中級魔法、ほんの一握りしか使えない上級魔法といった感

じ。けれど私は不安だった。中級魔法は直撃すれば無事じゃ済まない。その不安が伝わったみたいで。

「大丈夫だろ、あいつなら。俺は何度も見てきたしな。不可能を可能にするあいつを、な」

立花君はそう言ったけれど、あれは防御魔法 - 四大・理・対極とはまた違う魔法で、どれにも属さない魔法なので無属性魔法と言われる魔法に含まれる - を使わないと防げないだろう。無属性魔法はさっきのロクブラストよりも上位の魔法つまり上位魔法に分類されるので使える人は全くないから多分無理だろう。だからこれをどう切り抜けるのか、というのを観客は思っているのだろう。しかしこれは本当に危ない。そして会場は、轟音に支配された。しかしそれも一瞬だった。その理由は、彼だった。

「言っただろあいつは大丈夫だってな」

そこには彩人君は無傷で立っていた、寧猛な笑みを浮かべて。

「いくぞ」

彩人君がそういうと、周りの空気が変化した。気がする。そして目を疑う光景が広がっていた。

「し、 - 収束 - だと」

「おい、だれかあいつのデータを持ってないか」

「誰か、記事をかけ。今すぐだ」

「こんなやばいを見逃せるかよ」

と観客が騒がしくなる。だがそれも仕方がないことだ。今、彩人君が使った魔法 - 収束 - は最上位に魔法だ。それも無属性魔法のだ。今は氷の属性を付加エンチャントをしているが。 - 収束 - は無属性魔法を代表する魔法の一つであり、使える人が極めて少ないと言われる魔法だ。この - 収束 - の最大の特徴は、？魔法？を斬れる、というのだ。これが使えれば国から騎士団に入るように言われるなどのうわさがたつほどの魔法が目の前で使われたのだから仕方ない。そして彩人君が間合いを一瞬で詰め、一閃。勝負がついた。

「ほら、見てるだけじゃなくて話に行こうぜ」

と立花君が言い、階段を下りていく。それにつられて私も降りて行く。

「よう、彩人改めて久しぶりだな」

「おう」

と二人が言葉を交わして、彩人君がこちらを向いて、口を動かした。

「よう、梨紅本当に久しぶりだな。確か六年ぶりだな」

「うん、久しぶりだね。…生きていたんだ」

緊張はしているけど自然と口は動いた。私の知ってる彩人君だ。昔とあまり変わらなっていないなと思っていたら、最後に独り言が混ざってしまった独り言をつぶやいてしまった。しかし彩人君はそれに答えた。

「勝手に俺を殺すなよ」

それを聞いた瞬間、私は久しぶりに本当の笑顔を浮かべて一言。

「うんっ」

やっぱり好きな人がいると、幸せになれる。あんなふうに笑えたのは彩人君がいるからかな。こんな日々が続けばいいな

side 煉

「何いちゃついてるんだよこいつら」

「ん、何か言ったか。煉」

「いや別に何も」

そろそろ入団式の最後だな、こいつはしらんだろっかな。

『そろそろクラス分けを行います。至急、新入生は第一ホールに集まってください』

とアナウンスがなり、彩人が第一ホールに向かおうとすると、

「彩人君、私はBー1だから遊びに来てね」

「ああ、絶対行くよ」

と彩人が去って行ったその少し後で俺はある可能性を口に出した。

「あいつ俺らと同じ年だから、俺らと同じクラスになるかもよ」

言ってなかったが俺らは同じクラスだ。と言っても直接話したことがあまりないから顔見知り程度だけど。顔見知り程度に普通に親しく話しかけられるのは、こいつのいいところだろう。

「えっあ、そうか」

「どんだけ好きなんだよあいつが」

と分かりやすい事実を伝えたら。

「えっなんで分かるの。うう誰にも言わないでよ。約束だよ」

俺には分かりやすい事だったが、当の本人はうまく隠している、つもりだったらしい。この反応は面白い。

「誰が見ても分かるぞ。断言するし、保障する」

「そ、そんなのいないよ」

顔が真っ赤になっている。今更だがこいつに非公式のファンクラブがある理由がよく分かった。十二分に分かった。

「さあて俺らは教室に行くぞ。こんな日に遅刻はしたくないしな。遅刻したら、彩人の奴が何を言ってくるか」

こうして？俺ら？の長い長い入団式は幕を閉じた。もう一度言おう。？俺ら？のだ。俺は杉本とクラスに行った。どっかの馬鹿は律儀にフラグを回収した。それぐらいだった。

勝利の後（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）・ご指摘がありましたら遠慮なく
お願いします。

勝利の後の…（前書き）

新年明けましておめでとうございます。これからもツキトハクヤと「明日への系譜」よろしくお願いします。そしてパラスさんお気に入り登録ありがとうございます。

勝利の後の…

side 彩人

ううん、どうしたものの。さっきクラス分けがあるので第一ホールに向かおうとしたら、梨紅に自分の教室に來い、と言われたのだが、すっかりしてた。教室を何組か聞いていなかった。Bのなんとかと言っていた気がするのと、りあえず逢えないわけでもないし、この問題は頭の隅に置いておこうと思った瞬間。前から来た少女にぶつかってしまった。見た目は、黒髪の美少女と言ってもいいだろう。相手も俺に気付いていなかったのか、びっくりしたように声を上げた。

「きゃっ」

「っと、大丈夫か。ごめん俺が前を見ていなかったから」

「ううん、私も前見てなかったから、あつ怪れない」

「ああ、あつやば急がないと。じゃあ俺は結木 彩人^{……}またあったらしいな」

「えっ、今何ていったの」

「結木 彩人だよ。不本意ながら在校生代用と戦った。そろそろ時間がやばいから、また」

と俺は走り去った。一つ気になった事がある。

あの女の子が見せた表情は、あれは何だ。

怒ったような悲しんだようなそしてどこか安堵したような、複雑な

表情だった。…気がする

とにかく第一ホールについたので、早速、クラス分けを開始するらしい。

俺の年代は、つまり14歳程度はだいたいCかBだ実力で分かれるらしい。

「こういう分け方が実力の差別を生むんだよな」

正直、これは本音だった。どこにでもそういう腐ったやつがいる。こればっかしはどうしようもできない。

「ID30113の結木 彩人前へ」

ようやく俺の番のようだ。分け方は簡単、今、俺の目の前にある水晶に手をかざせばいい。

しかしこれは厄介だ。普通の生徒ならどうってことないのだが、俺みたいに隠し事をしている奴にとって色々面倒だ。

俺は言われた通りに手をかざした。

そして水晶が白く発光した。

「魔力は普通だな。属性は氷、ともういいよ。クラスはB-1で」とりあえず梨紅との約束は守れそうだ。

俺はそのまま教室のほう繋がっている通路へ向かおうとすると、何かにぶつかった。

「あつすいません。」

「おい、お前が結木か」

何だこいつ、俺に何か用でもあるのか。めんどくさい。

「すいません。今は急いでるので後にしてもらいませんか」

「テメえが結木か」

「そうだけど何か、用がないんだったらそこ通して」

「てめえは何組だ」

「答える義理がない。あとで勝手に調べとけ、じゃあな生憎約束があるんでな」

顔が見えた。思ったより厳ついやつだったが、個人的には関わりたくないな。虫唾が走る。

けど、まあ、早速、敵を作ってしまったらしい。

そして二、三分歩いたら、教室を発見したのでその生徒にクラスの場所を聞こうと思っていた。

が、そんな心配はなかった。何故ならその教室が俺のクラス、B1だったからだ。

暫くすると、他の生徒も何人来たので、軽く自己紹介をしていたら、教師が中から声がかかり、教室に入る。

「何だこれは、俺に対する嫌がらせか」

何故なら、梨紅をはじめとし、俺の知り合いが何人かいたのが理由

だったりする。

「担任の岸 亘きし わたるだ。この場を持って君たち新入生に挨拶をさせてもらう。これからよろしく。そしていち早くこのクラスに溶け込んでくれ」

その後、この時間は、君たちで自由に使ってくれ、と言い残し、去って行った。

そしてこのクラスのリーダーと言うか、委員長的存在の人が出てきた。

「さて、私たちが簡単な自己紹介をするわ、何か質問があったら手を挙げてください。ではまず、出席番号1番からお願い」

こうして自己紹介が始まり、途中から胃が痛くなってきた。何故なら、

「出席番号17番の杉本梨紅です。よろしくお願いします」

と律儀にも頭を下げ、挨拶をしている。しかしたまにこちらを向いてくるのはなぜだろう。

まあ、後ろにもっとやばいのがいるから、別に問題ないけど。

「出席番号23番、立花煉だ。よろしくな」

ニヤニヤしてこっちを見るのは、本当にやめてほしい。なんかいらつく。

さらにやばいのがいるんだよ、この後に出てくるんだよ。

「出席番号28番、夏本達也なつもとたつやだ。これからよろしく」

新入生が何人か、かつこいいと言っている。そんな奴に言ってるやいたいの、外見にだまされるな、そいつは優男の皮をかぶった悪魔だ。主に性格面でな。

なんでみんなこっち見ているんだ、ありえねえくらい恥かしい。

新入生の罰ゲームか。そのせいで、他の人もこっち見てくるし、そこに鶴の一声がはいった。

「最後に私は、米上杏奈よねがみ あんなよ。クラスの委員長、で何か質問は……無いわね。次は新入生の番よ」

新入生が簡単な自己紹介をして、最後に俺の番になった。

「新入生の結木彩人だ。多分みんな知ってるけどあれは誤解が入っているからな。そのあほ二人が変な噂をばら撒かなければ、の話だけど。これから、よろしく願います」

こんなもんだろうな。この後にお約束の新入生に質問タイムが訪れるはずだ。その前に俺はやるのが二つある。一つはクラス全員の顔と名前の把握、二つ目が重要だ。簡単に言くと、逃げ道の確保。なぜこんなことが必要かと言うと、

今の時間は朝のホームルームだったのかもしれない。

とりあえずチャイムが鳴り、案の定新入生に対する、質問の嵐が上陸した。

そして

「「彩人っ、チヨイまでやゴラァ」」

「ちょっと待つてよ彩人君」

悪友二人と幼馴染一人の突撃が始まった。これからにげるのにどん

だけ体力を使うか分からないので、少しでもスタートを有利にしたかった。勢い良くドアを開ける。そして全力疾走。並大抵の奴ならついてこれないのだが、？奴ら？は違う、無駄に有り余っている馬鹿みたいな体力、無尽蔵の活力、そして今までの説明に釣り合わないルックスの良さ、頭脳の良さである。たちの悪さなら、俺の知る限り、断トツナンバーワンだ。あつ梨紅を除く。

「待てといつとるんじゃゴラア」

「馬鹿かお前ら、待てと言われて待つのは、よほどの天然もしくはお人良しだ。それ以外には、この世の歴史には存在しないはず、生憎、俺はそんなことで歴史に名を刻みたくない。つまり俺は止まらない」

目の前には、階段が、一瞬で階段の駆けのぼると、そこには、こんな修羅場（？）じゃなかったら一時間は眺めていられるだろう見事な庭が広がっており、そこに隠れようとしたら、

「どこにいくのかしら、彩人君」

天然つまり梨紅が先回り、そこに悪友が二人仲良くご登場。

「さあて彩人、なんで逃げたのかなあ。こちとらお前のせいで五キロくらい走って汗かきまくりだ。こん畜生」

「馬鹿言え、体力とかその他もろもろが取り柄だろうが。第一俺も五キロ走ったし、お前汗かいてねえじゃんかよ」

「とりあえずなんで逃げた、結木」

おつ、達也がやつと一人でしゃべった。無駄に煉と声、被ってたかな。

そんな現実逃避が続けていると、煉が

「さつさと本題に入るぞ、なんで槍を使った。刀も選べたはずだ」

「まじっ、選べたのかよ。それは残念」

と軽口を叩いていると、今度は達也が

「適当に負ける気だっただろう。おれならきつとそうするし」

無駄な抵抗は諦めるか、こいつらに何言っても聞かないしな。

「」名答、やる気なかったし。少なくとも、梨紅を見るまではな」

突然話を振られ、ちょっと驚いている。

「幼馴染として、話しておきたいこともあったし、負けるところを見られるのは恥ずかしいし」

最後まで割かし本気だった、そして俺は伝えることを伝える。

「梨紅、六年前のことだ」

勝利の後の…（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）・ご指摘がありましたら遠慮なく
お願いします。

六年前（前書き）

新年明けましておめでとうございます。更新送れましたが、次からは普段のペースになると思います

六年前

side 彩人

昔、俺と梨紅、いや幼馴染達が住んでいた町、名前は覚えていないけれどその町は、四季の花が色とりどりで鮮やかだったので街の住人から『花の楽園』^{ガーデン}と呼ばれていた。

ガーデンは山に囲まれていて、他の町に行くのに手間がかかる、ということ以外は何の不満もない文字通り？楽園？だった。

六年前のあの日までは、

その日、ガーデンは？消えた？。文字通り消えた。

御世辞にも大きな町とは言えなかったが、そんな一日で消える町でもなかった。

世間では、これを？神隠し？と呼んでいた。なぜかというと、

ガーデンの住人が一人残らず？消えた？そこに在った建物などは一部例外を除き無事だった。

その例外が、その町で有名だった三つの建物

一つ目は、孤児院

これは、近くの町で捨てられた子供たちの唯一の居場所だった。

二つ目は、自警団の本部

これは、ガーデン内にいる自警団しか入れない場所だった。

三つ目は、民家

これは、唯一狙われた、民間人の家だった。住んでいた一家の名前は、

結木

そう、俺の家だ。その時、俺はたまたまガーデンから離れていたのを助かった。

いや、助かってしまった。家には、父さん、母さん、たった一人の妹がいたのに救えなかった。

だから梨紅は俺を見たときに驚いていた。俺もあの事件で助かった

人がいた、という事実のおかげで救われた気分だった。

俺はだれも助けられなかった、という罪から救われた気がする。

そう、世間では、？災害？と思われる。

だが俺は、ひょんなことから、この話の裏を知ってしまった。

これは？災害？では無く、？事件？だ。いや？事故？ともいえる。

「ねえねえ、彩人君、どうしたの急に怖い顔して。六年前に何があったの」

そうだった忘れていた。さっきまでは、何でもなかったが、今は口に出すのを躊躇ってしまう。

けどこれは言わなくてはいけない。

「六年前、お前はどうかやって生き伸びた」

「私は、気がついたら、みんながいなかった。ガーデンに戻っても誰もいなくて……怖かったよ。ほんとに怖かったんだよ。だから生きててくれて……ありがとね」

泣きそうになりながら、話している。泣いてしまったら、俺が消えてしまうと頑なに信じている様に。
だから俺がやってやれることは一つ。

「なあ梨紅」

「な、何かな彩人君」

まだ泣くのを堪えている。

「辛かっただろ、本当につらかったんだろ。泣いてもいいよ。俺は

消えない、絶対に。俺はここにいるよ。梨紅のそばにいるから。もう我慢しなくていいよ」

「う、だ、大丈夫だ、よ。ぜ、ぜんぜん辛くなかったよ」

「あああ、もう埒が明かない。梨紅」

なんでこいつはこういう時まで意地を張るかなあ、と考え、思った。そうか、こいつは今まで周りのことを考えて、弱い一面を見せなかったんだ。自分もつらいのに周りを励まし続けたんだな。俺はさっきまで、恥ずかしくて躊躇っていたことを実行する。

「えっ、な、何」

梨紅の顔を俺の胸へ強引にぶつける。

「っ！！」

顔を真っ赤にする梨紅。周りには煉と達也がいるから、恥ずかしいだろうけどそれよりも、

「泣きたいときは泣け、思いっきり。もう一回聞けど、辛かったよな」

優しく梨紅に語りかける。俺の質問に答えてくれるどうかは賭けだ。

「っ、辛かったよ、辛かったんだよ」

「だよな、もう我慢しなくていいよ。七年間お疲れ、休んでいいと

思うよ」

「も、うがま、んしな、くて、い、いの」

ほとんど泣いてるんだけど、それを言うのは野暮だな。

「ああ、俺はここにいる。お前は一人じゃないからな」

「あ、ああつ、うつ、うつ、つ、つらかつ、たん、だよ。あ、あやとく、ん」

暫くの間、梨紅は俺の胸の中で泣いていた。こういう時は思いっきり泣くしかない。こいつの心の傷はそれほど深かった。

そして梨紅に六年前の真実は、伝えない。これ以上、こいつに負荷をかけたくない。ただのエゴだが、貫き通せばこいつの為になるだろう。そう信じて。

「こいつの笑顔も守ってやる、俺が必ず」

思ったことが言葉に出ていたのか、急に後ろから声がした。そんなことはどうでもよかったのつで気にしなかったら、よりめんどくさいことになってしまった。

「さあて、おれらはのけものかなあ。ああやあとおうん」

「ん、ああ、お前らか。まだ居たんだ。てつきり帰ったのかと思ってた」

「あの雰囲気壊さなかったんだから良しとしろ」

「ははっ、壊せなかったの間違いじゃないのか」

「まあな、でどうするんだ。あの事、伝えるのか」

「いや」

「断言するんだ。おれはてつきさつさと話して、ハイ終わりって感じだと思っただけだなあ」

「おれもそう思った。どんな心境の変化だよ」

この二人にも話したんだっけ、あの日のことを。そのおかげでだいぶ楽になったんだよなあ。……多分。

「だけど、俺は、俺は、俺は、おれは、おれは、おれは、おれは、おれは、おれは……おれのせいなのか、おれのせいか、おれの、せいなんだ……ソウダ、オマエノセイダ。シンジツカラメヲソムケルナ。アノケツマツガユイツムニデゼツタイデカワルコトノナイシンジツ。オマエハソレヲシツテイルダロ。アノトキ、タダイカリナゲキ、ゾウオシカデキナカツタオマエガ……」

「お、おい彩人、どうした」

「違う、あれは俺のせいじゃない。お前は誰だ。」

「イヤ、オマエノセイダ。チガウナラナゼ、リクニハナサナイ。ソシテ

「俺はお前だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「おい大丈夫か、なんかおかしいぞ」

ハッと、顔を上げた。今のは夢か、嫌でも耳に残るあの声は、どこ

かで…

「お前がしっかりしないとその子、起ちまうぞ」

さつきまで泣いていたはずの梨紅は、可愛い寝息を立てている。そろそろ時間が危ないので梨紅を起こそうとする。

「おい梨紅、起きろ」

「すうすう、ん、むにゃむにゃ」

「仕方がないなあ、なあ、次、なんの授業」

「嫌あ、何というかあの、ほら、あれだよ」

なんでこいつら、こんな言い淀んでるんだ。俺なんか変なこと言っただか。

「つ、次は一応、授業ないんだよ。だからここには結構な人が来るから、ヤバイって言おうとしたんだけど。……話しかけていいよな雰囲気じゃなかったから、さ」

いや、そんな大事なこと、言わないってな。…おい待てよ、まさかさっきの？あのセリフ？を聞かれたりしてないよな。もし聞かれたら、恥ずかしすぎるぞ。

「……いつからだよ、それ」

「いやつ、ついさっきだからな。マジでほんとだぞ、なあ達也」

「お、おう。これは確かだ。おれが保証するから、さ」

「…いつから」

「お前が急に震えだした辺りだな。ほんとに大丈夫か、確実におかしいぞ。こんな季節に汗かいてるし、目の焦点もあってなかったぞ」

そんなことになってたのか、なんでだ。最近は思い出すことすらなかったのに。

やっぱり、梨紅に会ったか…

「うううん、ふあわ、おはよう、彩人君」

「ああ、おはよう。よく寝れたか」

「うんっ」

一々、笑顔が可愛いな、ヤバイ、もう少しで惚れるかと思った。そんなくだらない葛藤をしていると、

「おい誰かいるぞ」

俺らは寝起きの梨紅以外は全員が顔を引きつった。

「撤退っ」

「「おうつ」」

こうして俺の一日が過ぎた。いろいろ問題はあったが、なんとかやっていけるだろう。

こいつらもいるし。

俺は大切な人たちを守る。昔の俺を支えてくれた、大切な人たちを、あの時、俺の為に大切なものを捨ててくれたから。

- ホントウニ、ソウナノカ -

六年前（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）・ご指摘がありましたら遠慮なく
お願いします。

校長室にて

side???

「はあはあ、すう、はあはあ、すうう、はああ」

（ここはどこなんだ、この真っ暗な場所はどこなんだ。俺はなんでこんな所に）

彼は、自分がどこに向かっているのか、どうしてこんなところにいるのか、自分が誰だかもわからない。

記憶もない、感情もない。

ただ、焦りだけが存在する。

そして、彼の目の前に光が広がった。

「これで、やっと走らなくて済むのか…」

心から安堵した声だった。これまで彼がどんなに走り続けてのかが分かる。

しかし、彼の目の前から光が消えて、

その代わりに、辺りが真っ赤に染まった。

それに触れると、嫌な音と共に

ぐちゃっ

何かがつぶれた音がした。

そこには、彼の大切な人がいた。

もう戻らない大切な人が、何もしてやれなかった人たちがいた。

彼は己を呪い、恨み、憎悪、そして深く絶望した。

守れるはずだった、守れると思っていた。

自分は誰の為に、と思うしかなかった。

今までの自分がが無駄になってしまった。それだけで彼の先を^{みらい}否定

するには十分だった。

「お、俺はな、なんの、為に、あの日、…を誓ったんだよ」

「だから間違えるなよ、お前は俺のようになるな。こうなりたくないければ、選択を、な」

そして、鮮血の世界と共に彼は消えて行った。

side 彩人

「嫌な夢を見た」

と断言する。入団式から二日経ち、とあることがきっかけでこんなことを言わなくてないけなかった。その原因は、と言うとしつかりと次の授業の準備をしているが、心なしが顔が少し赤い。

「何て言ってたってなあ、みんな」

只今、俺こと結木彩人は、あり得ないくらいの危機に陥っている。クラスつまりB-1の男子全員の怒りと嫉妬と羨望と何かが入った感じでお説教中だったりする。そこに何人か、てゅーか半分ぐらいの女子が参加しているのはなぜだろう。ちなみに表情は、嫉妬と嫉妬と嫉妬と…だった。いろんな意味で女子のほうが怖い。

「だってなあ、杉本に膝枕してもらったて言う話で、目撃情報がたくさん上がっているんだぞ」

これが今回の問題、こればかりは事実であり正直、厄介だ。たまたま屋上の景色がいい所で昼寝していた。あそこは景色がよくて、眺めていたらうとうととしてしまい、気がつけば梨紅が俺に対し

て膝枕をしていた。

うなされていたから、と言われては返す言葉もない。梨紅は善意でやったことなので責められない。しかし、弁解ぐらいはしてほしい。見ていた夢は不思議で最悪なくらい、覚えている。

六年前の夢だった。夢と言えないくらいリアルだった。

内容は俺や梨紅や他の幼馴染達とみんなで遊んでいた夢だった。

夕日が沈んでも、いつまでもいつまでも遊んで母さんに怒られ、父さんに助けられ、妹に今日、どんなことをして遊んだかを報告、この後に家族全員で晩飯を食べ、散歩して眠る。

こんな当たり前で退屈でこの上なく幸せな日々の夢を、けれど今も俺にとっては、この上ない最悪で戻れないあの日々は眩しすぎる。

だからうなされていたのだろう。梨紅に逢ったことでもう一度あの日々に戻りたい、という願望が心の底から湧き上がってきたから。

「梨紅が善意でやってくれたんだから、それをどうこう言って責めるのは、おれじゃなくて梨紅を責めてるってことになるぞ」

「分かっているよ。だから俺たちは嫉妬でお前に当たってるんだよ」

「理不尽だああああ」

叫ばずにはやってられない程度には理不尽だった

「嫉妬ってなんだよ。煉とか彼女いるじゃん。他にも何人もいるし、そっちにも当たれよ」

「違う、違う、お前は杉本にやってもらったんだろ、あの杉本にさ。そこが重要なんだよ」

そんなどうでもよかったのだが、適度に反論しないとこつちがひどい目に逢う。だから今、俺はこの教室前にいるとある人物にアイコンタクトでタイミングを教える。そいつがいないとこの馬鹿騒ぎは収まらないだろう。

「しかも女子は何だよ。俺なんも悪いことしてないよな」

「えっそんなことも分からないの結木君は」

なんか怖い、けど濡れ衣だったら洒落にならないので理由を聞くと、口を揃えてこう言った。

「『『存在が悪いんだよ』『』」

「そうですか俺は存在することも許されないんですか」

滅茶苦茶傷ついた。男子ならともかく女子にまで存在否定されるなんて。ああ家に帰りたい、なんでこんな目に逢ってるんだろう。俺特に何もしてないんだけど。

「お、おい彩人、今の全部冗談だから。気にするな、って泣きそうになるなよ。頼むから」

冗談ですか、冗談でこんなひどく言われるなんて嫌だ。せめて本気のほうがよかった。

「ゆ、結木君、だ、大丈夫だよ」

唯一俺の為に声を掛けてくれたのはクラスメイトのええつと米上杏奈さんだった。クラスの委員長らしい。だから声をかけたのかな

あと思っていたら、

「今はこんなだけどほんとはもっと良いクラスだから、ね」

と、俺の頭を撫でてきた。子供っぽいからやめてほしかったけど、ほんの少し嬉しかったので何も言うわない。そして悪の根源に神の鉄槌を下さなければ。

「今だ、紗紀っ」

この場のほぼ全員が驚愕していた。それもそうだ。何故ならこんな場面で女子の名前を言うのはあり得ないから、驚愕している。約一名を除いて

「う、ウソでしょ、それだけは洒落にならないから、あああああ助けてええええ」

悪の根源、つまり煉は恐怖で顔が引き攣りながら、全力で廊下に飛び出た、……はずだった。

「んどこ行くの煉、恋人がいるのにこんなのに参加してるってどういうこと。私と別れたいのかな、そおなんだ。へえ、あっそうだ結木、教えてくれてありがとうね」

「まって、違う誤解だ何かが間違っている、彩人お前裏切りやがったな」

「どっちがだよ。彼女を大切にしろよ。ああ別れるんだっけ、そんなこと言ってたもんねえ」

「煉、そんなこと言ったの」

「言っていないから、本当に、別れたくないから、お前が大好きだから紗紀、頼むからああああ」

ガシヤッ

ドアを思いっきり閉めても煉の悲鳴が聞こえる。断末魔だろうか。

「何だったの今の」

「あいつは煉の彼女で名前は富岡とみおか 紗紀さきだよ。見ての通りの美少女だな」

さっきの一瞬の光景をまだ信じていない奴も何人かいるんだろうが、彼女持ちの奴らは普通じゃあり得ないくらいに震えながら自分の席に着いた。

「やっと解放された」

心からの安堵、あんな修羅場にはもう遭遇したくない。

「ねえ結木君、ちなみにさっきの嘔泣きなの」

「ああ、あんぐらいで泣くかよ。確かに傷ついたけど。さっきはありがとうな」

「う、うん、どういたしまして」

「さて俺も席に着くか…」

『結木 彩人学園内にいたら直ちに校長室へ来なさい。繰り返す結木……………』

「…」

「…」

「…俺なんかやらかしたのかなあ」

「「「逝つてらっしゃい」」」

「…うん」

校長室は意外にも場所が分かりやすかったので特に迷うことなく着いた、のだが

ここで学園長の人柄について言わなくてはいけないだろう。

名前は風間 爽太かざま そったこのギルド 旅立つ為の羽 のギルドリーダーつまり一番偉い、そのキャリアは二十歳の時いこのギルドを創立し、それから十年後に大手のギルドの仲間入りをし、その時から、このギル学を開いたらしい。そしてつい最近に悪竜討伐という快挙で四大ギルドの仲間入りし、後第ギルドの一角になった。だから結構すごい人だったりする。そんな人物とは、実は、

「結木です。失礼します」

ドアノブをひねった瞬間に - 収束 - を展開、校長室に入っている人物に斬りかかる。ここまでの時間はなんと二秒未満だったりする。本気で斬りかかったので当たったと思った、が
ギイン

という音がし、向こうも - 収束 - でこちらの攻撃を防いでいた。

「腕鈍つたんじゃないか、昔なら一秒未満で展開できただろ。やっぱり封印を付けていたらそんなもんか」

知り合いだったりする。

「まあ魔力を枯渇させる封印を付けてもまだ魔法が使える奴なんてお前しかないと思うけどさすがだな」

腕を隠そうとしたら、金属が擦れる音がする。そう俺は腕に封印が付いている。死刑囚用の魔力を枯渇させる封印が、他の封印を合わせるのと五つもある。これは人としてあり得ない数だが理由はある。

「仕方がないだろう取れないんだから」

相手は苦笑し、答えた。

「そうだったな、そろそろその殺気を収めてくれないか。胃が痛くなる」

今俺は非常にムカついている。何故なら

「お前の周りの環境と人物か」

その通りだった。俺にあのクラスは合わない。それはクラス全員が眩し過ぎるのだ。だから居心地が悪い。

「お前は無理しすぎだ。少しは休んでほしかったからな」

「ダウト」

今の発言は少なからず嘘だった。

「なにっ」

「そんなことだったら、俺をこの学園には呼ばないだろ、何か厄介事がない限り俺を呼ばないはずだ」

これが俺がこいつと一緒にいて学んだことだ。

「バレバレか、じゃあ本題に入ろう。この学園にはお前にかかわる人物が多すぎる、しかも最悪なことに人を惹き付ける才能もある、お前に似てな。そして狙うやつも多い。ここは実力制だからな、そういう腐ったやつらも出てくる。だから同世代のお前を入れて、少しは身の程をわきまえろ、ということをお願い知らせてほしい」

「誰だ俺にかかわりのある奴なんてクラス以外にもいるのか、だったらすぐに教えろ」

「すぐにわかるよ、で今日から学園内で決闘を行えるようにした」

「決闘だと」

オウム返しで聞いてしまった。けれどこいつが俺を呼ぶんだったら厄介事だ、確実に。そこは俺を信頼してということなのだろう

「ああ、決闘だ。例えば俺が今からお前に決闘を申し込むとする、それをお前が承諾すれば決闘の成立だ。そのまま闘技場でどっちかが気絶するまでの勝負だ。それでお前が…」

「腐った奴に喝を入れればいい、ということか」

じゃあ俺は聞きたい、何故俺がここにいいのか何故おまえがあの事を知っているのか

「じゃあお前は」

「お前を呼んだ理由はここ以外は盗聴される心配がある、それとあの・力・はお前の判断で使えそれと1封印のことは華凜かりんに聞いた」

「っ」

思わず息をのむ。華凜とは、本名、崎島華凜さきしま かりん 俺の師匠にして、ガ―デンの元住人である。あの事件も数日前から行方不明になった人物。

「…生きていたんだ」

「ああ、お前のことを嬉しそうに語っていたよ」

だったら説明がつく。風間が俺のところへ訪ねてきたわけが、俺の力を知っているわけがすべて納得がいく。

「師匠に顔立として何も聞かないけど、いつか全部聞くと、…爽太」

「ああ近いうちに、な」

そう言っただけ俺は校長室から出た。俺にかかわりのある人物うを探しに行くために。

しかし、それは暫くできなそうだ。

何故なら目の前にいる人物がとても無視できなかったから、

「梨紅、か」

「う、うん。あの今朝はごめんね、あんなことになるなんて」

朝のことを謝りに来たらしい。なんとまあ律儀だなあ。

「俺は特に気にしてないって言っても気かねえよな、…そんなうなされていたのか」

「…うん、ずっと、ごめんなさい、って呟いてた」

そんなに堪えていたのか俺は、あの時俺はできることをすべてやったのに。それは心配はするよなあ誰でも。俺も梨紅がうなされてたらなんとかするだろうし。

「だから言っておきたかったことがあるの」

「ん、なんだよ」

「あの日のことはよく覚えてないけど、彩人君が頑張ってたのは覚えてるから、あんまり自分を責めないでね」

なんてこった、俺はこいつを守ろうって決めたのに、逆に守られつつあったのかよ。情けないな、俺は。

「あ、あと三日前はありがとう」

俺、何かしたっけ全然覚えてないけど、なんだ

「その顔は忘れてるでしょ、私が泣いた時に慰めてくれたこと。結構うれしかったんだけどなあ」

「だからまた泣きなくなったら俺のところへ来い、愚痴とかでも付き合ってやるぞ」

「ずるいよ、彩人君………もっと好きになっちゃうよ」

最後のほうが全然聞こえなかったのだが、それを聞くと今は機嫌がよくて花が咲いたような微笑みを浮かべているが絶対怒るので遠慮しておこう。

「じゃ何か軽食でも食べに行こうぜ、ちなみに割り勘」

「そういう時は男の子が奢るものでしょ普通は」

考え事は後にしよう、だって今は梨紅の機嫌を取りながら、どこで飯を食うのか考えなくてはいけないから、

「こういう休みもたまにはいいなあ」

「早く行こうよ、彩人君」

「何でもないって今すぐ行くから、さ」

いつまでもこんな日常が続けばいいのに……

校長室にて（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）・ご指摘がありましたら遠慮なく
お願いします。

あとPVAアクセス五千人・ユニークアクセス千人を超えました。こ
のまま頑張っていきたいのでこれからもよろしくお願いします。

いざ食事へ

side 梨紅

「どうした梨紅、すごく嬉しそうだぞ」

私はあんまりポーカーフエイスが苦手らしい。

現在、私こと杉本 梨紅は大好きな人と一緒にご飯を食べようとしている。これってやっぱりデートだね、周りからはそういう風にみられるよね。その…カップル

でも……朝にあんな事もあったし、迷惑なのかな、だったら私は居なくなつたほうがいいのかな、私とそういう風

に見られるのは嫌かもしれないし、彩人君は、優しいから言わないだけかもしれない

「やっぱりやめようか、食べに行くのは」

「えっと、どうして」

今、考えていたことが顔に出ていたのか、彩人君はそう訪ねてきた。

「だつてお前、顔色悪いし、なんか下向いてばっかだし、俺なんかと一緒にいて変な噂流されたら嫌だろ」

「大丈夫、考え事してたからそんな風に見えただけだよ。ほら、何ともないよ」

と言って、軽く手を動かしたり、その場で回って見せた。彩人君はちよつと心配そうだったけど納得したように歩き出した。

「あ、あのさあ、彩人君」

「なんだ、恋愛相談はお断りだぞ」

少し違うけど、だいたいは当たってる。男の子の勘はすごいな。彩人君限定かもしれないけどさ。それより、聞きたいことがあるから大事なことが

「や、やっぱり彩人君はえつとあのその……私が一緒にいると迷惑なのかな」

さっき彩人君が私に言った一言、一緒にいると迷惑か、と聞いてきた。彩人君は私のせいで朝にあんな目に逢ったし、私が原因だから迷惑になってないか知りたい。もし、もし私と一緒にいて迷惑ならその時は…

「もし迷惑って言ったらどうする」

「えっ」

「もしお前と一緒にいて俺が迷惑ならさ、お前は どうする」

「そ、その時は私は彩人君の迷惑にならないに過ごすよ」

そう、好きな人に迷惑をかける位なら、私は遠くで見てるだけでいい。それだけで満足だから、それだけで私は満たされるから

「ダウト」

彩人君はそういった瞬間私の目の前に立ち、私の顔をしっかりと見

ていた。真剣な表情で、絶対に破られない約束に誓うようにしつかりとこう言った

「そんなこと思ってるなら飯に誘わない、愚痴なんて聞いてやらない、慰めたりしない、普通だろ。迷惑掛けるからって何なんだよ。お前が幸せならそれでいいだろう。今のお前には自分のことで精一杯だろ。お前がそこまで俺のことを考えているのは、嬉しい。けどなあ」

彩人君の言葉は私の胸に突き刺さるような強さで、私を包み込むような優しい響きで、その優しさに甘えてしまいそうで、でも私にはそんな権利は無く、それでも言葉は紡がれていき、私は葛藤してしまう

「お前はもう少し他人に甘えろ、辛かったら辛いつて言えよ。だから前みたいなことになるんだよ。だからそんなこと言うなよ、絶対に。俺が守るよ、梨紅の笑顔を、梨紅の幸せを、梨紅の全てを、お前が祈ってくれたら、俺には必ず届く。そして実行してやるから。だからさ笑ってくれよ……大切な人の泣いている顔なんて見たくないから」

だからこんなにストレートに言われると、恥ずかしくて、驚いて、自分が馬鹿馬鹿しく思えて、とつても嬉しくて、だから

「だ〜から、泣くなよ。あんな恥ずかしい台詞を言っても笑顔にならなかつたら、如何すればいいんだよ」

彩人君が困ったように、恥ずかしいように、照れたように言う

「ち、ちがうよ、こ、これはう、う、嬉し泣きだよ」

涙が止まらない。三日前よりも泣いている気がする。私ってそんな泣き虫だったのかな、今ぐらいは許されるだろう。

私は彩人君の二の腕に抱きついて、甘えながら泣く。他人がどう見ているのか分らない、けれどそんなことはどうだっていい。だって今、私、杉本　梨紅はとっても

「満たされているから」

彩人君はそんな私を少し可笑しそうに見ながら、黙って私の居場所になってくれている。だから忘れない、さっき彩人君の約束を、ずっとずっと覚えて行こう。その約束が道標みちしるべになってくれるはずだから、この広い世界の、きつと長い私だけの物語の、道を照らしてくれる

「さあて、飯を食べに行くか」

私に向けられた質問、答えは一つしか存在しない

「うんっ」

今、私は確実に笑顔を浮かべている。だって好きな人と一緒にいられる日々は幸せ以外の何でもないから、嬉し過ぎて今までの考え事が馬鹿馬鹿しく思えるくらい

こんな日々がいつまでも続けばいいのに……

side 彩人

ヤバイヤバイヤバイ

今、俺はとてつもないミスを犯した。なんであんなところで梨紅を傷つけるようなことを言っただ。その後に意味のわからない恥ず

かしいだけの台詞セリフを言ってしまった。なので今、顔が可笑しいほど赤い気がする。触ったら手が溶けてしまいそうな位に顔が熱い。なんだか知れないけど梨紅は笑顔で笑ったのですべてよし、というわけにはいかない。だってその後に溜息をついてた気がする。しかも飯なんてどこで食べるのかも考えてなかった。

その瞬間ときに女神が舞い降りた。そしてこのピンチを救ってくれた

「あのさあ、彩人君、私が行ってみたいお店があるんだけど、言ってみてもいいかな」

ナイスです。さっきまで泣いていたとは思えない程に元気になってる梨紅に案内してもらう。

そしてたどり着いた店は喫茶店のようだった。どこか懐かしいと思う雰囲気がある。個人的にはすごく気に入ったので時間があるときには来ようかな、などと考えていたら、横で梨紅が腕を引っ張っていき、半ば強制的に入店することになった。まあ嫌じゃないし、そうでもしてくれないといつまでたっても俺は店に入らなかつただろう。

ちなみに店の名前は『レスト』だった
「いらつしゃいませ」

とどこかで聞いたことのある声が聞こえる気がするけど気にしない。

「彩人君、あのさっきの話だけど大丈夫かなあ」

梨紅が不安そうに聞いてくる。ヤバッさっきの話ってやたら俺が恥ずかしい事を言っつて、梨紅にあきれたかもしれないやつか、鬱になってきたよ

「あの台詞セリフは恥ずかしかったから忘れてくれ、呆れただろあれには」

と先手を打ったと思っていたのだが、梨紅は物凄く怒った顔をしていた。俺は何か地雷でも踏んでしまったのかな

「彩人君の馬鹿、なんでそんなこと言うのよ、それとも私に言ったあの言葉は嘘だったの」

そんな訳がない、そんな訳があつてたまるか、梨紅には一度しか嘘をついていない。その一度が問題だけだ。

「もちろん嘘じゃないって分かつてる、分かつてるけど、そんなことと言わないでよ。呆れるわけないでしょ、私の為にやってくれたことに呆れられる訳ないでしょ………かつこよかったよ」

そんなこと、そんなこと言わなくていいよ。頼むから言わないでくれ。このままじゃあの日と何も変わらない。そんなのは嫌だ。

「だから約束しよ」

「えっ」

我ながら間抜けな声を出してしまった。なんで約束するんだ、てか何をだ。訳のわからない事しかない。

「彩人君は自分の言ったことを、自分のしたことに責任を持ってよ。そしたら私は彩人君に甘えられる。これでどう、この約束、守るの、守らないの」

駄目だ、あり得ない。梨紅は俺に無理な約束をさせようとする。卑怯だ、だってそんなこと言ったら俺が――

「断れる訳ないだろ、そんな理不尽な約束」

俺は、大切な人が幸せになればそれでいい。その中には当然のごとく梨紅はいる。だから梨紅が辛い目に逢わなければ何でもする。それが俺の信念

「ふふつ、じゃあなんか頼もうよ。おなか減ってきちゃって」

「じゃあ、俺は……何にしよう」

メニューを睨む。なかなかに安い、どれもつまそうだ。どれにしようか悩むな。つてもつと繁盛してもいいんじゃないか、この店。少しあたりを見回すと俺ら以外に人は七人ぐらいしかいない

「おおーい結木、無視すんなよ」

さてそろそろ構ってやらないと可哀想だな。と考え、返事を返すために体の向きを変える。案の定、俺の知り合いだった。親友といっても過言じゃない

「久しぶりだな、大助」

「気付いてるなら返事を返しなさい」

変に上からな物言いの人物の名前は、日渡 ひわたり 大助 だいすけ 实力は下手したら、俺らの中で一番かもしれない。この場合の俺らとは、俺、煉、達也、大助、あともう一人、名前は遠坂 とあさか 智樹 ともきの五人のことだ。けれども、俺には封印、煉や達也にも何か秘密がありそうだし、智樹に限っては實力は未知数なところもあるので、真実ではない。属性

は火、得意な武器は色々使っているのでよくわからないが、一番多く使っているのは、自らの拳だったりする。なので近接戦闘が主だ

「その口調はやめとけ、女子に嫌われるぞ、主に香里ちゃんに」

「ぶつ、はあはあ、な、な、なんで香里が出てくるんだよ。関係ないだろ、って卑怯だぞ」

香里ちゃんとは、フルネームは坂本^{さかもと} 香里^{こおり}で大助の彼女、そして俺らの一つ年下の後輩だ。で、大助は香里ちゃんの名前を出すと非常に面白い反応をとってくれる。その証拠に今、何故か知らないけど、自分で乗っていた水をぶちまけた。そしてその水は俺の黒い服にかかる、瞬間に氷に変わってしまった。

「つぶねえな、俺は一応、客だぞ」

「良かった、冷やかに来ただけじゃないのか」

どんな印象を持ってやがる、俺は、煉に比べたら大したことないし、達也と比べたら、…比べてほしくないな、アイツとは

「まあ、煉や達也と比べたら痛くも痒くも無いけどさあ」

どうやら同じことを考えていたらしい、俺も、もし彼女ができてもあいつらにだけは言いたくない。絶対に祝ってやる、とか言って拉致監禁されるに違いない。大助もやっぱりそのことを思い出したのか、ぶるぶると震えている。

「そうだ、このパンとコーヒー、お願い、梨紅はどうする」

一応客なのだから注文しなければ失礼である。さつきからメニューを眺めていた梨紅も注文する品が決まったみたいだ。

「だったら、私も同じパンとコーヒーです」

へえ、梨紅もコーヒーを飲むのかあ、と考えていると梨紅が話しかけてきた。

「さつき私が言いたかったのは、私とええと、その…抱き合ってるところをクラスのみんなに見られたらてい変じゃない」

「あつ」

忘れてた、朝、クラスでどんな目に逢ったのか。あの時は偶然に紗紀がいたから切り抜かれたが次はそうはいかないし、膝枕であれだったのだから、抱き合ってたらどれほどひどい目に逢うか、想像したくない。だから梨紅は聞いてきたのか、なのに俺はそこまで考えられなかった。最悪だな、守るって言うっておきながらこんなことしちまって

「大丈夫、梨紅が心配する事じゃない、っあ、けど弁解は手伝ってくれよ、それだけはお願する」

「ふふっ」

梨紅は楽しそうに笑っていた。けど梨紅が笑っているならそれでもいいかと思えるほどに可愛かった。

『ああーああー聞こえてる、コレとりあえず聞いている奴に報告だ、今日から朝六時から八時半、放課後は決闘を申し込めるぞ』

急に放送が流れた。このやる気のなさは確実に風間だ。曲がりなりにも奴は学園長だし、内容はさっき俺に言ったことか

『ルールは簡単、適当に相手を選ぶそして決闘を申し込む、相手が承諾したら、決闘開始だ、さっき言った時間帯に闘技場が空いてるから、予約でも取ってやってくれ、基本は同じ相手は無しだが、結木 彩人だけは何回でも決闘を申し込まれてもいい。勝った方は学食が安くなるぞ、以上』

「なんだりゃあああああああ」

つまり色々な恨みを買っている俺は大変な目に逢ってしまう。これが叫ばずにいられるか。

いざ食事へ（後書き）

誤字・脱字・感想（雑談でも可）・ご指摘がありましたら遠慮なく
お願いします。 畑山香樹さん感想ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4906z/>

明日への系譜

2012年1月12日21時45分発行